

ラデノクロバーによる

経営の解決策

(岩手県北盛岡酪青)

菊池 弘

一 動 機

私の家は、盛岡の都心部より北に六キロ岩手山麓武庫原開拓地に昭和二十六年十月入植一町一反を耕作し、乳牛六頭、和牛一頭を飼育している純農家です。

第一表 経営概況(二九年度)

耕地	一町一反
乳牛	六頭
牛舎	一五坪
家族労力	二・五人
雇用労力	二五〇人
サイロ	六尺×一八尺 九尺×一八尺
作物名	陸稻、玉蜀黍、馬鈴薯、カブ、ライ麦

従来までの経営を振り返つて見ますと、

第一表の通り青刈を主体とした飼料作物を栽培しておりましたが刈取適期は極めて短く、また播種管理刈取そして再び播種というように、労力も多く年間二五〇人も雇用せねばならず、また栄養価、収量共に少ないため購入飼料の依存度が高く、市乳地帯の一升六〇円の高乳価にもかかわらず、年

間を通し牛乳売上代の三〇%~五〇%の購入率であり、さらに借金の返済、設備の拡充等で極めて苦しい経営を続けてまいりました。

この経営の解決策としては、労力が少なく単位面積当りの収量とそれに伴う最高の栄養価を有する作物はないものかと、私は搾乳するたびに、そして野草を刈る毎に、脳裏をかすめておつたのでありましたが、如何ともすることができず、父が三十年このかた生業として続けてきた苦しい牛乳屋さんから、私は足を洗つて盛岡に出て俸給生活に入るうとさえ考え、意見の相違から父とかなりのいさかきも来たすような暗い生活を送るようになったのであります。

たまたまその時東北農試の佐々木先生の講演を聞き、また目的を同じくする北盛岡酪研会があることを知り早速入会し、そして青葉若葉の三十年五月酪研会一同が東北農試を訪れ、佐々木先生の案内でラデノクロバーのけい牧状況を見学したのであります。

目にしみる程繁茂した緑のラデノクロバーをさも美味そうに牛が喰んでいるではありませんか。しかし草だけで乳が一斗も出る。牛は健康的で労力は少なくてすむ。これだ、と私は早速佐々木先生に質問の矢を放つたのであります。そして両親にもよく相談し、東北農試に同行して見せ、ラデノクロバー栽培に対する了解を得たのであります。

直ちに実施したかつたのですが、時期が遅れたので試作用として、デントコーンの間作に移植を試みた結果コーンの刈取り一カ月後には畑一面繁茂し、給与できるようになったのであります。これに自信を得、更に綿密な栽培計画を樹立し刈取回数毎の坪刈の実施、牛尿の適期追肥、けい牧の適正化、乳量、脂肪の測定等の計画をたて、三十年九月二日ラデノクロバー混播牧草の種が投下され、わが経営に劃期的大変化をもたらしたのであります。以下実施中の経営と集計より見、三十年度とどのように変化しつつあるかを説明致します。

二 経 過

まず最初に三十年九月二日に播いた耕種概況は第二表の通りであります。この結果としてレープ、ライ麦は、初期生育がよく、これを年内に青刈として反当約五〇〇貫を得、青物の少ない時期に非常に役立つたのであります。明けて三十一年二月頃より堆肥五〇〇貫を雪消しと肥料を兼ね雪の上から撒布しました。四月十二日待望のラデノクロバーにけい牧が始まりました。これが

第二表 耕種概要

播種期 昭和三〇年九月二日
作付面積 六反歩
播種方法 全面積播種

反当り	レイプ	五合
播種量	ライ麦	三升
	イタリヤン	一・五
	ライグラス	ポンド
	ラデノクロバー	ク
	オーチャード	ク
	グラス	ク

反当り	堆肥	八二〇貫
施肥量	炭カル	三〇貫
	過石	一〇貫
	硫安	五貫
	塩化加里	三貫三〇〇
	硝安	一貫三〇〇

青刈飼料となれば当地としては、五月中旬でなければ青草を与えることができないのであります。

最初は三十一年度初めて青草を喰べさせるので鼓脹症に十分気をつけまして、一日三分、一時間、一回とだんだんに喰べさせ、四月十六日より三回けい牧以来回を重ねる毎に、収量も増加、第三表によつても明かなように最高五〇〇貫、利用回数はなんと一六回、けい牧地反収二、九三二貫、移植地三、二四〇貫、けい牧最終日十一月十五日、延数二二日従来までの青刈給与期間一二〇日に比べてかくだんの相違が表われたのであります。

参考までにわが家で生産された飼料作物の反当収量及び栄養価を比較して見ましても、第四表のとおり青刈の代表作物コーンに比較しても反収一五〇〇貫五九二FE、

第三表 牧草収量

月日	けい	い	牧	月日	反収(担)
一	四・五	四〇〇	一五〇	一	一三〇〇
二	五・二	一〇〇〇	一五〇	二	一三〇〇
三	五・六	一四〇〇	一七五〇	三	一六〇〇
四	六・三	一〇〇〇	一六〇〇	四	一六〇〇
五	六・〇	一三〇〇	一五〇〇	五	一五〇〇
六	七・三	一〇〇〇	一五〇〇	六	一五〇〇
七	七・四	七〇〇	一五〇〇	七	一五〇〇
八	八・二	一〇〇〇	一五〇〇	八	一五〇〇
九	八・五	一〇〇〇	一五〇〇	九	一五〇〇
十	八・四	一〇〇〇	一五〇〇	十	一五〇〇
十一	九・三	一〇〇〇	一五〇〇	十一	一五〇〇
十二	九・三	一〇〇〇	一五〇〇	十二	一五〇〇
十三	九・四	一〇〇〇	一五〇〇	十三	一五〇〇
十四	一〇・九	一〇〇〇	一五〇〇	十四	一五〇〇
十五	一〇・三	一〇〇〇	一五〇〇	十五	一五〇〇
十六	一〇・三	一〇〇〇	一五〇〇	十六	一五〇〇
平均	一〇・三	一〇〇〇	一五〇〇	平均	一三六六

第四表 飼料作物反収及び栄養比

ラデノクロバ	収量(担)	F	E
ラデノクロバ	三六	一五〇〇	
デントコーン	三〇	五九三	
レール	元	三〇〇	
カブ	二三	二七	
ライ麦	八	五	
馬鈴薯	一〇	四七	

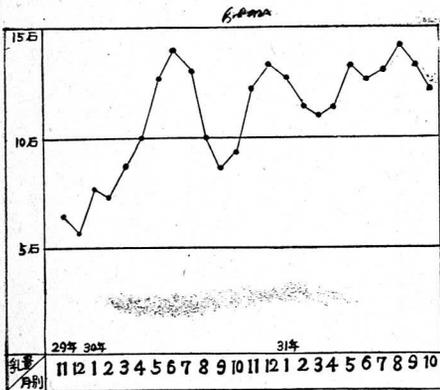
DTPで二〇担ラデノクロバでは収量は二倍、栄養価においてはFEにおいて三倍、DTPでは一〇倍という大きな相違がある

ことがわかります。また労力面においては青刈時代においては平均作物別一〇人以上は必要なのに比して、わずか三人で可能であります。ではこのけい牧が乳量にどのような影響を及ぼしたのであるでしょうか。

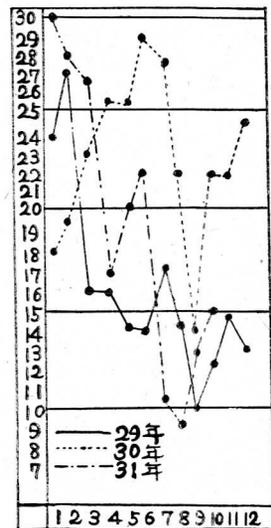
第五表を御覧下さい。分娩時期あるいは生産年齢の如何によつて比較することはできませんがこの図表により見ますと、三十二年度青草最盛期の五、六月頃においては非常な山を成して、盛夏の候には谷をなしておるといふ曲線の変動の多い泌乳量であり、したがつて経済的に極めて不安な状態でありましたが、三十一年度はこの曲線の山がほぼ平均上昇され、最高一五石四斗、最低一石二斗、平均一三石となり、また一頭平均にして三十年度二三石に対して三十一年度は二七石と大きく上昇しております。

乳量の上昇もさることながら濃厚飼料の

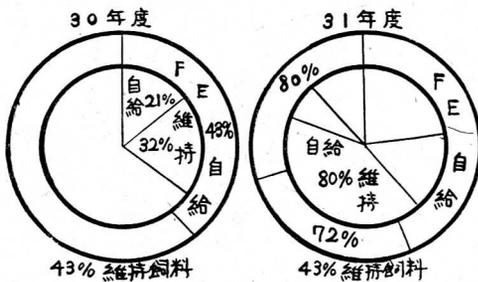
第五表



第六表 濃厚飼料代



第七表 自給率の増加



節減も著しく第六表の通りであります。冬期間においては、図表上からは大差は無いのでありますが、けい牧初めの四月より大きな差をなし、平均乳代の三〇%〜五〇%にかつたのが、今年度は最低八月にわずかに一〇%、けい牧の平均一八%を節約できたのであります。

しからば自給率においては、どのような変化があつたでしょう。第七表を見ますと、三十年度においては、FE四三%で維持飼料しか自給できず、また蛋白においては維持分も自給できず、わずかに二一%、それが三十一年度においては飼料単位にお

いて七二%、可消化純蛋白質では八〇%も自給できるようになつたのであります。

三 結 論

以上いろいろラデノクロバのけい牧によつて変化したのでありますが、では一体この草を播種するのにどの位の経費がかつたのでしょうか。第八表の如くであります。反当五、八一五円ありますがこの経費は三十一年度だけではないのであります。かりにこの牧草が八年間使うことができました時は、反当七二七円という誠に微々たるものです。そして三十二年度からは管理費尿撒布と堆肥と少量の磷酸が必要ですが、大部分自家生産の物で間に合つております。

このラデノクロバの一貫当りの経費を調べて見ますと、移植地一反歩では五〇銭、けい牧地では四三銭となりました。次に一升当りの生産費をまとめて見ますと、第一〇表の通り三十年度は五八円三二銭、三十二年度は三四円六九銭で大きく生産費の減少を見ました。さらにラデノクロバ反当り生産価値を調べて見ますと、牛乳一升標準四五円として六万三千円となり(一升六〇円とすれば八万四千円)他の畑作物に比して最高水準の利じゆんを行くものと思つております。

最後に収支決算を調べて見ますと、三十年度において赤字の月が二回もあり、平均では総収入の五%の純益しかありません

